

文月七日の日、一とせの埃に埋もれし鐵行燈の油さし、机硯石を洗流し、すみわたる瀬々も芥川となしぬ、

油商

〔七十一番歌合上〕七番 左 あぶらうり

宵ごとに都に出るあぶらうり更てのみ見る山崎の月略中

左歌暮ごとにとこそいふべけれ夜やはあぶらうるべき略中

山崎やすべり道ゆく油うり打こぼすまでなく涙かな略中

左歌二首ながら、第三句にあぶらうりとをける、ふところせばくきこゆ、そのうへ此歌の故事を思ふにも、山ざきのうばがもとに、あぶらかひにいたればとこそ侍れ、それをいま作者なれば、油うりとよめるも、本説にたがふめり、たゞあぶらかひと詠べきにこそ、

〔奇遊談二〕山崎會合初

城南大山崎八幡宮の神官の家にして、毎年正月十六日の夜、會合初といふ式例あり、略中 同正月油賣へ免狀を渡す式あり、これも上下の兩大夫を召て諸國の油賣共は參りたるやいなやをとふ、參りたるよしを申せば、さらば免狀取出よやとて、一紙の文章に朱印を印て渡ことなり、今は兩三紙認て、此山崎の油屋におくるとぞ、

〔人倫訓蒙圖彙四〕油屋 大坂長ぼり天満にてまほり所々へ出す、京むき江戸むきとてあり、むかしは山崎を名物とす、今はなし、

〔天保十一年武鑑〕御燈御油屋 中ばし廣こうじ 御油御用所 津田小十郎

〔續修東大寺正倉院文書四十一〕合錢五十貫七百五十三文略中

二貫三百六十九文 油三斗七升三合沽略中

天平寶字六年十一月一日上

油價